○早くも話題騒然!! 迫力イラスト ストーリー

イラスト○幡池裕行
ストーリー○花園由宇保
企画○伸童舎

狩猟機(カリュウド) MOBIRIA 1092

SECT.2「練法師―レンポウシー」

あいやぁ
御用と御急ぎの無き方は
御立ち寄りあれい
さあて
此に取り出したる剣を御覧じろ
遥か昔
彼の竜の国に勇者鳳王(フェンオウ)在り
驚く勿れ
或る地に山程にも成る百頭千尾の魑魅居て
度々人に禍為すを聞き及ぶに
鳳王『されば其を征伐せむ』とて
独り渡り合ひて討ちとりたり
いやさ
その時王の使いし剣こそ何あらむ
我が弓手に抱えし剣で御座ぬ
さあさ、買わぬか買わぬか
一目見て二目とは拝めぬ品で御座るぞ
〈或る行商の口上より〉

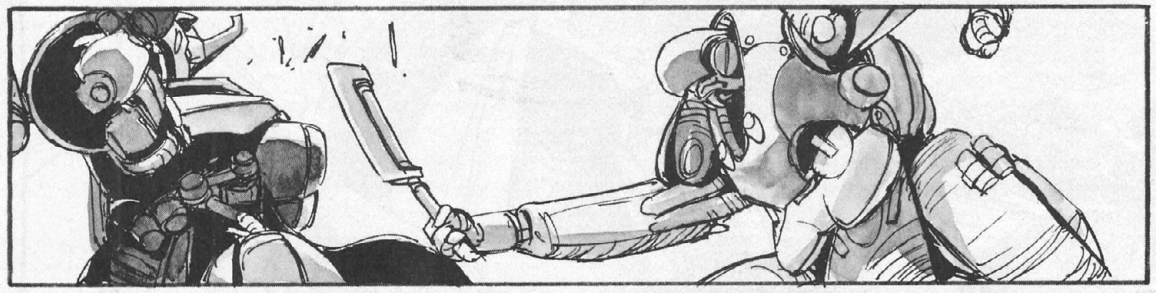
月も無い静寂の闇。
深く繁った木々の中に、対峙する二つの影があった。
「拙僧はハイダルを駆るダム・ダーラ。この地の領主ガルーシャに仕えし練法師なり……」
ハイダルといういかつい操兵から、押し殺した声が響く。
それは無線ではなく、操兵に仕込まれた拡声器から聞こえる割れて歪んだ音である。
——何だ、こいつは……。
バシュマールを駆るフェンの頬に汗が伝う。
既にその操手槽はハイダルの放つ闘気で満たされ、噎(むせ)返るようであった。
「彼の名高き魔界より、遙々と貴様の首を頂戴に参った。いざ、覚悟せい……」
ハイダルが異様な闘気を迸らせながら、じりっ、じりっと間を詰める。
「練法師だか祈禱師だか知らんが、てめえのような気色の悪い奴に俺の大事な首が渡せるか！」
右手に構えた剣の柄に静かに左の手を添え、低く身構えるバシュマール。

鞘に掛けた操兵の首がどさりと地に転がる。
バシュマールを見据え、ゆっくりと躙(にじ)り寄るハイダル。
その距離二〇。
「今は亡きハオの息子フェン。貴様は我等に仇成す者。残念だが生かしてここを通すわけにはいかぬ！」
背中に装着していた大鉈(なた)を外し、素早く右の手に握るハイダル。
だが、既にバシュマールの体は重力制御用動力の軽やかな回転音を漏らしてハイダルの頭上を舞っていた。
——!?
一瞬バシュマールの姿を見失うダム・ダーラ。その顔に微かに驚きが浮かぶ。
——どこだ……。
慌てたダム・ダーラは、すぐさま感応石にバシュマールの影を探す。
そのときであった。

不意にバシュマールの顔がハイダルの背後から肩越しに覗く。
——!!
気配に振り返ろうとするハイダル。
しかし、一瞬速くバシュマールの剣がその喉元を締め上げた。
「言え……。何故俺のことを知っている！」
剣の刃に片手を添え、両手で更に強く締め上げるバシュマール。
ギギッ……。
バシュマールの腕が鈍い音をたてて軋む。

「ふっ……。ふはははは！」
突如狂ったような高笑いを始めるダム・ダーラ。
「貴様、一体何をしているつもりだ……」
ダム・ダーラが言うが早いか、ハイダルは腰を落としてバシュマールの腕の中からするりと抜けた。
——何!?
慌てて計器に目を走らせるフェン。
彼はこのとき初めて、いつの間にかバシュマールが制御不能になっていることを知った。
「ははははっ、間抜けめ。見たか、これぞ練法陰縫異の技なり！」
ハイダルは素早く後に跳んで身を翻し、バシュマールを見据えて大鉈を構えた。

ところが、練法は決して幻術やまやかしの類などではない。
この陰縫異という技にしても、練法書第七巻一七二章に元を辿ることができる。
それに拠れば、秘に敵の足元などに陰針という細い電磁針を打ち込み、付近の磁場を共鳴させてその動きを封じるというものらしい。
常時不安定なこの地の磁場を巧みに利用した理に適う技なのである。
だが、フェンがそのことを知るのは、まだ後のこと。今はただこの怪しげな技の前に為す術もなく立ち尽くすのみであった。
「どうだ、動けまい。練法の恐ろしさを地獄の亡者どもに語り伝えるがよい！」
ハイダルが地を蹴り、大鉈を振りかざしてバシュマールに襲いかかる。
——ば、馬鹿野郎！
フェンは何とか逃れようと必死に計器板の抓を弄った。だが、やはりそれらは何の反応も見せてはくれない。
ガッ！
大鉈がバシュマールの肩の辺に食い込み、その鈍い感触がフェンにも伝わる。
彼は、そのとき生まれて初めて敗者にのみ与えられる恐怖というものを知った。
「く、くそーっ。俺を殺してみろ。一生祟ってやるぞ！」
行き場のない恐怖が、フェンの中で次第に怒りへと変わっていく。
——やはり、村の連中の口車に乗って旅に出たのが間違いだったんだ！



一瞬フェンの頭の中を怒りと後悔が駆け抜けた。
そのとき突然ハイダルの動きが止まった。
厚く垂れ籠めた雲の絶え間より姿を現す満々たる月。
「ちっ……。邪魔が入ったか！」
空を見上げて口惜しげに呟くダム・ダーラ。
「何れまた星の導きに依りて相見える時があらん。それまで貴様の命預けておくぞ！」
素早く身を翻して闇の中に消えるハイダル。
「てめえ、勝負半ばで逃げるのか。この卑怯者め！」
フェンは悔しさに任せ両の拳で計器板を殴りつけた。
そのときである。
その衝撃のせいという訳でもなかろうが、突如バシュマールの計器類が作動を始めた。
「やったぞ。俺の念が伝わったに違いない！」
フェンは手早くバシュマールの機能を確認しながら、久々に体中の血が燃え滾るのを感じた。
それは決して悔しさや怒りからのものではなく、命を賭けて闘える敵と出会えたことへの喜びからきた心地好い興奮であった。
「野郎、練法とやらより数倍恐ろしい俺の執念を見せてやる。行くぞ、バシュマール！」
バシュマールはハイダルの影を求め、激しい動力の振動音を残して勢いよく飛び出した。
フェンの立ち去った後には、置き忘れられた数個の操兵の首と、再び訪れた静寂だけが残った。

いや――。
微かにではあるが何かが聞こえる。
風の音だろうか。
確かに先程から微弱な唸りにも似た響きが伝わって来ていた。
おおおおぉぉぉ……。
んんんんんんん……。
次第に大きくなり、やがて消える。
それは恰(あたか)も寄せては返す波の如くであった。

おおおおぉぉぉんんん……。
そうろぉ……。
候……。
御座……候。
闇に紛れて御座候。
御身の御加護を賜わりて、
浄土踏まぬと御願い奉り候ゑ。
おおおおぉぉぉぉぉん……。
やぁぁぁぁぁぁんん……。
在りて候。
見て候。
今宵の宵の宵宮
御身戀(こい)しと御待ち参らせ候。
ううぁぁんんん……。

ゲン、シャク、リリクと呼ばれる原始的な楽器の音に乗せて詠まれるその歌は、正しくツキヨミ達のものであった。
ツキヨミは月を求めて地を彷徨(さまよ)う民。その生活は今も多くの謎に包まれているという。
決して安定することなく――それは僅かながらではあるが――日々形状を変えながら大海を流転する大地。
何人も知らぬその地の果てを見し者ども。
或る者はツキヨミ達のことを『時を修復する民』と呼ぶ。

フェンが領主の館へ辿り着くのに
さほどの時はかからなかった。
そこは岩山の頂を切り取って造られた広大な台地に聳える要塞。
闇に紛れて全貌は定かではないが、その不気味な影は遠くカシュガルの市からでも望むことができる。
「さあ、行くぞぉ……！」
目前の館を見据えて徐ろに剣を抜くバシュマール。
哨兵がその姿を発見したのであろう。既に館の門は開かれ、警護の操兵達が得物を手に手に走り出ている。
「てめえら雑魚に用はない……。命の惜しい奴は道を開けろぉ！」
剣を振り翳して操兵達の中に切り込んで行くバシュマール。
フェンの目は辺りを探って小刻みに動いている。
「ダム・ダーラ。遙々決着をつけに参上した。速やかに姿を現せぇ！」
バシュマールが剣を振る度、操兵たちの首が跳ね上がる。

操兵達はその勢いに恐れを為して逃げ腰となり、身を引く者が大半であった。
バシュマールは、べっとりと油にまみれた剣を振いながら館正面の大門へと差し掛かる。
だが、そのときである。
「拙者の屋敷内で騒ぐは御主か……」
二つの顔と屈強な四本の腕を持つ不気味な操兵がバシュマールの行く手に立ちはだかった。
それは、領主ガルーシャの駆る操兵、ジャイコである。
「き、貴様は……!?」
ジャイコを目にした途端、フェンの顔色が変わった。

「貴様は父の敵!!」
素早く身構えるバシュマール。
極度の緊張がフェンを襲う。
それを見据え、ゆっくりと印を結ぶ領主ガルーシャ。
「……ゐ……ゑ……ゑ……ゐ……」
その念と共に、突然バシュマールの仮面が砕け落ちた。

■つづく■